

上矢敲氷伝

——天明九年・寛政元年——

清水 茂 夫

天明九巳酉年（一七六六）には、上矢敲氷は五十八歳になっていた。相変わらず筆まめに日記を記しているが、文字などもやゝ乱れ、記述も大まかになって来ている。老宗匠として活動が多忙を極めるに至ったことも筆跡に影響しているかも知れない。

天明九年は一月二五日には寛政元年と改号されているので、一応寛政元年として敲氷の俳諧活動を整理してみようと思う。幸いにも日記は天明九年の新春から書き始まり、第二冊目は孟夏から始まり、第三冊目は孟秋から始まっている。この三冊の「座右稿」を中心とし、他の「運斤録」や俳諧作品などを総合するとその俳諧活動は全体を把握することができる。記述に当たっては、（ ）の中に年や月日を記し、その後には敲氷の俳諧活動や作品、俳友や門弟との交渉などを掲げることにした。

一 俳諧活動の実態

（元旦）の句は「閑居試」と題して「万歳よはしら少なき庵も訪へ 平橋庵敲氷」である。万歳は正月を彩る風俗の

一つで、家々を訪れて祝言を述べる門付芸人であった。万歳は万年の意で、訪れた家に対して万年も栄えませと予祝のことばから出た名である。甲斐を訪れたのは三河万歳であって、太夫と才蔵の二人で組み、主役である太夫は、才蔵がうつ鼓につれて舞を舞い、また共に歌を歌って祝言を述べたり、時に二人で滑稽な問答などをしたのであった。「万歳がほめし柱に梅活けん」という大江丸の句が「はいかい袋」(大江丸著)に見えるのによれば、万歳が家の柱などをほめることがあったのであろうか。敲氷は自分の貧しい庵の柱は少ないが、立ち寄ってくれと依頼しているのである。敲氷は天明七年の元旦の発句にも「古庵のひづみ直さん飴繩」と吟じていて、平橋庵が古ぼけたのを心に懸けていたようである。

(二日) 春興十句 敲氷

- 1 神風の出雲や今も八重がすみ
- 2 朝市に待つ久しさよ鶯菜
- 3 荒磯の砂打払ふ干鱈哉
- 4 春雨や獅子舞の宿はさがしき
- 5 薬門に栽植したる柳かな
- 6 小式部が住し跡にも桜の花
- 7 うぐひすや今朝おぼろげに見たばかり
- 8 若草に牛黒々と夜明哉
- 9 火とぼしの傘すぼめゆく柳哉
- 10 山梨神社神官へ贈る。粥占やまだ見ぬ秋の賑はしき。

1は、年頭に当たり、神代に須佐之男命が出雲に須賀宮を定め作られた時、雲が立ち騰るのを見て作られた歌「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を」を思い浮かべての句である。こうした古典的教養は、加賀美光章に学んだり、また甲斐の国学者と親しく交わることに基づくものであろう。6の句も同じ傾向の句である。小式部は平安時代の歌人で、父は橋道貞、母は和泉式部で、万寿二年（一〇三三）十一月に、二十八歳前後で没している（吉田幸一氏説）。小式部は天折しながらも幾人かの公達に求愛されたのは、中宮彰子に出仕すると共に、社交の場に永くいて魅力的才媛であったからであらう。「小倉百人一首」にある「大江山いくの道の遠ければまだふみもみず天の橋立」の歌も敵水の意識にのぼっていたであらう。そして小式部の住居の跡を想像し、そこにも春を迎えた桜の花が美しく咲いた光景を詠じている。2・3・7・8・9などは、春興にふさわしい日常の景色や生活を素直に吟じている。4の獅子舞は、新年の季語。万歳などの門付芸人にまじって、各戸をめぐって祝福の芸能を行った。多くは赤い顔の獅子頭に唐草模様の緑の布をたらし、その中の中に二人の舞人が入って舞う形のものであった。正月特にこれを演ずるのは、獅子が神もしくは神の代理者と考えられ、これを舞わせることによってその年の幸いが家々にもたらされると信じていたからである。5の柳は春の季語で、枝垂柳である。「柳櫻をこきまぜて」というように、春の柳は春の景の中心の一つである。緑の美しさと春風になびく姿の美しさは万葉集以来、日本文学の中で強く賞賛されている。敵水も柳に対する愛好ぶりは甚だしい。日記などにも賛美のことが屢々目につく。蕨茸きの貧しい門のはとりに栽植した柳の萌え出た姿は素晴らしいと感動しているのである。10の句の粥占というのは、正月十四日或は十五日の粥をたく時、粥の中に筒や管を入れて、その中に入った米粥の具合によって新年の豊凶などをうらなうことである。句の前書に「山梨神官」とあるのは、山梨岡ノ神社の神官であらう。「甲斐国志」によれば、日光権現と称し現在春日居町の鎮目にある。その社記には、「山梨岡ノ神社ニシテ、……正月十四日ノ夜筒粥ノ祭アリテ年ノ豊凶等ヲ占フ」とある。敵水は粥占の行事を想い、

今年の秋は豊作であろうと神官に対し祝意を表したのである。

(三日) 「田龍七十ノ初度」と前書して、「春ごとに聞けや齢も百千鳥 氷」。前書の初度は生まれた時、誕生日のことである。出典は「楚辞」の離騷編で、初度之辰などとも言つ。ここでは田龍が七十回目の誕生日を迎えたのを祝福して吟じた句である。句の百千鳥は沢山の千鳥の意にとると、冬の季になり、春三日の吟としては無理がある。百千鳥は沢山の鳥の意味を持ち、それを春の季節に該当させて、沢山の鶯と理解できる場合もあるので、その意味にとって、春毎に鳴く沢山の鶯の楽しい声を聞いて、百年も千年も長寿であることを祈りますという意味になるであろう。

(四月) 「神内川奥山氏八十賀、春祝といふこそ」と前書して「色まして猶幾春ぞ生の松」この句も新年を迎えた奥山氏が八十歳となった二重の喜びを祝すると共に、庭前の生々とした松が緑を濃くして幾年も成長を続けるように、あなたもますます元気な顔色で幾年も生き続けることとしようとの前途を祈っているのである。

(五日) 縣令黒川来訪。縣令は代官所の役人のことである。黒川も時折敲氷を訪れている。

(六日) 「粟雪(吹)や升に積らばいかばかり 氷」

(八日) 加茂の梅花齋の初会に赴く。

(十二日) 初会百韻興行。連衆三十一人。「庫裏の夜は粥から明けて梅の花 抱山宇」「解くる筧に本末の水 氷」という発句と脇で百韻が始まった。天明九年一月十二日に、敲氷の弟子たち(連衆)が、三十一人集まって、天明九年の月次会の最初の俳諧の会を催した。百韻の発句は、敲氷の師である抱山宇門瑟の「庫裏の夜は」の句で始まり、続く脇(二句目)を「解くる筧……」と敲氷が付け、続いて連衆三十一人が順に付句し、一めぐりすると敲氷がまた付句するといった具合で、百韻は完成するのである。

(十三日) 牧笛庵へ行く。

(十五日) 信州伊奈郡原村茂太夫、古川阿老の書翰を携えて来訪する。東武へ赴くよし。「ふる年を打ち忘れけり花の春女繁子」。

(十六日) 上諏訪の乗松磯八が来訪し、七十の年賀の句を所望する。(十七日) 蔵六来る。「荒磯は松に隔て、柳かな蔵六」「はたご屋の門毎吹せつ梅の風 同」(廿日)「匂ふから尋ねあたるや梅の花 終里」の発句に「まだ春しらぬ雪の山陰」と敲氷が脇をつける。「春興 早飯の拳ゆるむや春の雨 終里」の発句に「普請場に絡び捨たる柳哉」と敲氷が脇をつける。発句と脇の指導をしたものと推定される。

(廿四日) 向富山山主「蒙求」を携えて来訪する。向富山は桜井村(現甲府市)の逍遙院と称する曹洞宗の寺であり、「蒙求」は唐の李瀚の撰で古代から南北朝までの有名な人物の、類似する言行を二つずつ組合せ、四字句の韻語で記し、故実を知るに便利な書である。向富山の和尚などと漢籍を読むこともあったように思われる。同日うかひ山初会に赴き、おの／＼玄鳥の題で吟じた際に「衣張にさはらで出入る燕哉 水」と吟じた。

(廿六日) 風恵坊が来訪し、駿河に赴く由で別れを告げた。午時岩泉山と向富山へ年礼に行く。童歳が来訪する。「凍解けの土試みる玄鳥哉」「燕や一日に海何千里」の二句を持参する。

(廿八日) 午時から風起つ。余寒甚だしい。府下へ行き夜に入り帰庵する。この日の作「春雨や畑かけまはる爺が夢水」「蜻の出て人怖しけり朧月 水」(廿九日) 桑里来訪、その句「つくはねの音も冴えけり竹瓦 桑里」

(晦日) 送別吟「風恵坊の令郎駿河国の郡斎にありて、こたび迎おこせるによりて別を告げらる。かしの梅の雪に似たらむもをかしからめど、此の地の雪の梅に似たるも、はた見捨てがたくうしる髪ならずや。富士川の岩なみはやく、行く船に祖坐の盃もめぐる事又すみやかに。旅笠の行衛や富士の横霞 水」。鳥仙ぬしの老夫である禅門の死を悼んでは、春寒し坐禅衾も記念わけ 水」両句は敲氷と共に俳諧に遊んだ人々への送別の句と死別の句であるが、敲氷の人柄

がこまやかに現れている。

(二月二日) 青鳥より文通の句「叱っては馬牽向かす野分哉」(六日) 昨夕より祖父五十回忌。午時から岩泉山に参詣す。岩泉山は光福寺で、隣村の横根村にある浄土宗の寺で、敲氷家の墓所がある。(七日)「初午や子供頭に成て出む。」敲氷は二月の最初の午の日祭りが催され、部落の子供組が祭の中心となつて行つて行つて見、特に子供たちを指図している子供頭の姿に、子供時代の自分を想い出しながら、懐古の情から吟じたのであろう。

(八日) 今宵後藤氏の許に行き夜話。日記の中に夜話の語がいくつか見える。禅宗関係では夜の修行の爲にする訓話を夜話という。また広く夜ばなしを筆記した書物に夜話と題したものがある。敲氷の用いた夜話も単なる世間話ではなく古典・漢籍など学問的な話をしたのではなからうか。この日文通で「山越えて梅の薫るや春の風 孤峰」「塀越しに聞く鶯の初音かな 白里」の句が届く。(十日) 両吟歌仙興行。「一盛り引手あまたのよめ菜哉 童歳」を発句とし「柳は洗い髪はの霽は 氷」を脇として「三十六句」を吟じた。

(十二日) 平橋庵で定会百韻興行をする。連衆十七人。「苗代や苦はほどもなく楽の種 氷」を発句として行われた。

(十三日) 去る十日到着した江戸の葛飾からの文通に次の諸句が届いた。「伸びくつて結ぶ柳や丸木橋 再蝶」「白魚や今宵よ宵の初櫻 同」「杖曳けば蛙の音や臘月 同」「紅梅にたきたてられて雪解哉 同」「梅がかや誰ぞと人問ふ垣隣 米珠」「先三日眼鏡は入らず初曆 同」「世の中に構はぬ庵も初日哉 乱竿」「水底へ影は届かず臘月 同」「誰が子ぞ初商に齋売 抱山宇」「物数奇の竹聯かけて梅の花 同」。再蝶・米珠・乱竿等は柳居門の俳人で特に抱山宇門を師とする人々であった。抱山宇の高弟である敲氷とは親密な関係を保ってしばしば文通をしていた。(十四日) 甫秋采访。その句「水音の響に動く柳哉 秋」「降りそつた空にもあらず臘月 同」「暑き日や翼に倦又馬に倦 同」。(十五日)「涅槃会や庫裏では猫が昼寝する 終里」涅槃会は二月十五日釈尊の入滅の日に報恩のため行われる法会であり、この日寺

々では涅槃像をまつり、遺教經を誦したり、涅槃諸式を読んだりする。寺によっては餅や団子をまいたりするので子供達にとっては楽しい年中行事の一つであった。終里のこの発句に敲氷は「日はうらくと座具に梅が香」と脇を付け、午時から終里・元斎・素麟らと歌仙興行した。夜に入って素毛が来訪したので更に歌仙一折を興行した。「寝た竹も起きるにけふの涅槃哉 素毛」の発句に対して敲氷は「経高らかに園の鶯」と付句した。「菜の花の黄金光る涅槃哉 氷」(十六日) 柳美来訪し、その句「梅咲や火宅の沙婆と思はれず 美」「山里や齋尋ねる足の跡 同」「なきがらを極彩色や涅槃像 同」(十七日) 池月堂の主人来訪し、古き懸物について物語る。玄旨法印の「けづりおく茶杓の竹のかひあらば我が後の世をすくひ玉へや」 沢庵和尚の「物の中にひとりすぐなる身を持ちて我をゆがめる竹のふし哉」 宗圃居士の「ゆがまする人にまかせてゆがむなり、是もすぐなる竹のこゝろに」 右の三首侍りしよし。玄旨は細川幽齋で、歌・連歌の作者として有名、足利義晴の四男である。足利家没落後は信長・秀吉に仕え、重臣として重んぜられ歌学・古典の才学でも知られる。沢庵和尚は臨濟宗の僧。紫衣事件で幕府と抗争して出羽に配流された。後水尾天皇に原人論を講じ、徳川家光の帰依を得て、品川に東海寺を開く。その書は茶道で珍重された。宗圃は、重徳編の「塵塚」(寛文十二年刊)に、宗圃・冥之・欠伸・慶純・言富・不及・宗了・照乗の和漢俳諧が収められている。一角の俳人であったと思われる。敲氷は古人の真跡に強い関心を持っていたことが察せられる。また来訪した楼堤が歳旦の句として「若水を汲んでいただく山路哉」を持参し、二窓は書信に「梅が香や折々東風の運ぶ頃」「生酔の道面白し臘月」を送って来た。(十九日) 昨夕より守真の亡父十七回忌に招かれた。

(廿日) 八代へ行き夕暮帰庵する。前夜求古が泊った。「花の為降るならば降れ春の雨」求古のこの句を聞いて「花のため雨祈る客留めにけり 氷」と応じている。(廿一日) 柳美訪れて「涅槃会や三人揃ふ泣上戸 柳美」を示す。

(廿二日) 市川涓川が来訪する。「春雨に打たれて開く木の芽哉 涓川」を発句とし「学びの窓に鳥の囀」と敲氷が脇

を付けて、両吟歌仙一折を興行する。五民からの消息に次の二句を送られる。「鶯や来て誘ひ出す旅ころ 五民」「うぐひすや起きごろよき昨日今日 同」(廿四日)藤之木(現御坂町)の梶原氏来訪、発句を所望する。(廿五日)三洞庵で聖廟法楽が催され、百韻興行をする。聖廟は孔子の廟で、江戸の湯島聖堂は著名であるが、甲斐において聖廟法楽が百韻興行として営まれたことは漢学の繁栄と俳諧の流行の結合している点で興味深い。興行後は各々松柏を題として発句を吟じた。敲水の吟は「二度見たといふは虚なり松の花 水」(廿六日)昨夕より求鳳亭の年回法筵に招かれた。小池氏来訪する。小池氏は琴河と号し、名は正俊、字は子鶴、上矢作村(現一宮町)に家塾を開いた。詩文は古賀精里を驚かしたという。郷学由学館の初代教授。亀石が出版した小篇を送って来た。

(廿七日)藤崎(現大月市)連の代理が訪れる。山梨へ行き、夕方帰庵する。(廿八日)柎里亭の法筵に招かれて歌仙興行。「何がし柎里子は過ぎ玉ひし北堂の為にひじりを招きて、作善いとなみ侍らんと也。やつがれも法の筵につらなりて孝子のころざしを感じけるまゝに、「竹の子も芽を出して居る雪解哉 水」(晦日)前夜より風邪を受けて終日平臥。「句作の思ふまゝなり春の雨 谷水」

(三月二日)風患坊駿河へ着く後、用事の文通来る。(三日)「松風の通うて鳴らせ雛の琴 水」岡山古ぬしが一女をもうけて、はじめての雛遊びをするのをごいて贈る句、「長かれよちとせももとせ桃の花 水」。折しも都の春のにしきである頃、其有長兄が、都に旅立ち赴かれるのを送る句「柳さくらこきまかせてけさわがねけり 水」(四日)湯沢(現甲西町)の和狂が来訪する。本名は依田官蔵という。「覗くなと呵ってのぞく桜木哉 和狂」(五日)八代に行き白桂の内人(婦人)の病を訪ね、夕陽に帰庵する。(七日)「鍋一つ浸した中に落椿 春沢」「苗代や牛のやうなる石一つ 同」春沢は佳吟二句を持参した。(八日)川中島(現石和町)の間庵堂に奉納句の跋を白亀が勧進するのに応じて「うそ鳥よ虚言囁らば舌ぬかむ 水」を納める。鶯鳥は、雀より少し大きく優美な色彩の鳥で「ヒューヒュー」と笛を吹く

ような良い声で鳴くので籠鳥として飼われる。俳諧では二月・三月として用いられる。ここでも三月として採り上げられている。「鳴く時声に随ひて両脚を互にあげて、琴を弾き手を揺がすがごとし。故に俚俗うそ琴を弾くと称す。あるいは形麗しく声艶なるをもつて、うそ姫といふ。」と『和漢三才図絵』に見える。

(十日) 尺五からの文通に「似た顔の一人も見えず涅槃像 尺五」「年々の東下りや雛の市 同」の二句がある。去月廿五日柏下坊が卒した。去年の夏、草風ぬしは、釈氏の姿と成り、芥子の実の一句を吟じてみずから柏下房と称し、いよ／＼信心に怠りなかったのに、今年如月の頃何となく睡眠に犯される様であったが、安楽国に赴かれた。彼岸も半ばばかりの日であったのは、いと恭けない終わりであった。「名残をしき御文や帰る雁の声 水」

(十二日) 定会百韻興行。連衆十六人。「梅津にも梅より多し桃の花 水」(十三日) 藤の木(現御坂町)の梶原氏来訪し、自画讃を所望する。北山禅林の使僧として風條五民が来訪する。元ざねは城南からの帰りに立寄って黄昏に及んだ。春沢から文通に「念仏のかねには散らぬ桜哉 春沢」「永日や雨も三度降り休む 同」の二句あり。(十四日) 今日石和・二宮・八代を経回って、夜に入って帰る。(十八日)「鶯や岩の屏風へ飛んで行く 連水」「人知らで花になりけらし露の露 同」の二句を携えて来訪する。(十九日) 亀石東屋社奉納額携えて来訪。「行幸から道開けたり山桜 水」敲氷は奉納額の跋として上の句を奉納する。三峰の新井理兵衛が来訪し、三峰の人々の敲氷の短冊所望を申し出る。

(廿日) 山梨御神楽に参詣する。現在春日居町鎮目にある山梨岡神社に参詣し、そこで催される太々神楽を拝したのである。その折の二句。「庭燎かと見まがふ岡のつゝじ哉 水」「おもしろや花降りかゝる御忌衣 同」

(廿一日) 善光寺に参詣する。古尺来訪三句持参する。「春雨や月もほのかに有ながら 古尺」「出ぎらひと隣歩行や春の雨 同」「盛りにも訪ふ人稀な梨の花 同」(廿三日) 求風同伴で八代に行く。夜終里亭で三吟歌仙興行する。(廿四日) 長瓜子子供同伴で来る。庄木社奉納の額を和好勧進するに応じて「桃の花折かけ筒のみきの口 水」を奉納する。

(廿六日) 仲亮来訪し、その吟に「はな紙の間に幅たか(袱) 紗と董哉 仲亮」。筑路願主となって御岳山(『甲斐国志』では蔵王権現と言ひ、現在は金櫻神社と称す。現甲府内御岳町にある)に奉納の勸進をうけ「神垣や盛り幾日の峰の花氷」を奉った。(廿七日) 池水が同庚の老人同伴で、信州善光寺参詣の旅用意して来訪したのに対して「散る花をとめくへ行けよあみだ笠 氷」の句を贈った。(廿八日) 岩泉山に参詣した。(廿九日)「蚕飼する宿は戸ざして春暮ぬ氷」と吟じた。当時の農村風景が眼に浮かぶ。白桂ぬしの婦人がみまかったのを悼んで「摘むを見ても袖しぼるらし桑の露 氷」と吟じた。去る廿一日没し、廿七日この追悼句を贈った。また弄花が小篇を出版するに際して「植ゑし人の碑建てん山ざくら 氷」と巻軸の句を贈った。

(四月朔日)「青竹の杖心地よし更衣 氷」古い慣習とは言え、陰曆四月一日の更衣の日を迎えて、冬の綿入れを拾衣に着替え、身軽になり、青竹の杖をついて散歩することは、快的なことであって、自然に即興的に吟じられた句であろう。(三日) 昨夕から山鶏大詳忌法延を営んだ。家業を委せ、加えて俳諧宗匠の後継者と意図していた長男山鶏の三回忌を迎えて、老の我が身に鞭打ち続けたようである。(四日)「今独活をほる山やほととぎす 氷」夜、来雪亭に招かれ歌仙興行をし、夜深んで帰った。門弟の巴人から、駿河の国の帰途阿部の山中で得た名だたるものを贈って貰ったが、昨日の雨のつれづれ取り出して盧同の趣に習って、「いざ新茶煮て一碗に一句づつ」と吟じた。敲氷が「阿部の山中で得た名だたるもの」と記しているのは茶であり、「盧同の趣」と言うのは、茶道である。盧同は唐の人で、学を好み博覧で詩に巧みであったが、仕進の意がなく少室山に隠れた。茶を好んで孟諫議の茶を恵んでくれたのに謝して歌を作った。甘露の変に殺された。韓愈は盧同の月飾の詩に感じて「盧同に寄する詩」を作って称讚している。敲氷もこの故事に倣ったのである。

(五日) 二日から今日まで長瓜夫婦が孫千助と共に逗留する。長瓜は敲氷の次男で、山鶏の弟。山鶏の没する前に、

八代に入籍していた。天目山人が入来する。天目は志村礼助で、諱は益之、字は子謙で、現在一宮町の末木に、手島堵庵系の心学を目的とする忠款舎を開いていた。敵水の親交ある友人として相互に影響する所が多であった。(六日)午時から子供同伴で岩泉山に参詣し、つゝじ・わらびを取って帰る。(七日)善光寺に参詣する。文通による二句。「上下の髪積もきれいに更衣 仲亮」「盗人には是もとらせよ衣がへ 百童」。

(八日)「誰見ても似た顔はなし仏生会 氷」仏生会は釈迦の誕生日(四月八日)を祝う法会である。花御堂に祭られた誕生像に香湯や甘茶をそゞぐのであるが、仁明天皇の承和七年(八四〇)に宮中で灌仏が行われ、以来宮中の行事となり、今でも世の中で花祭りと呼んで親しまれている。花御堂の中で右手を高く上げて天を指し左手を下げて地をさしている裸のかわいいお釈迦様の顔を見ていると誰一人として似た顔をしている者はいない、と感ずるのであろう。(九日)昨夕から俳諧の仲間であった牛歩居士の十三回忌に招かれた。牛歩居士は生前ひたぶるに酒を楽しみ、それで下戸である者を囿るのであったが、今は「なくてぞ人は恋してふことむべなり。」と詞書して「紅葉焚し昔語や夏木立 氷」と吟ずるのであった。(十二日)定会、百韻興行する。(十八日)阿老からの文通にて二句届く。「静さや雲の音さく枯かしは 阿老」「桃咲いて酒売る家や藪の中 同」(廿七日)長瓜今夕まで逗留する。堀内引蝶が訪問する。「一声を聞けばなつかし時鳥 引蝶」。初音を待っていて聞く時鳥の一声、それを聞くとなつかしくいとほしい思いがするということ味と、同じ門瑟門として俳諧を楽しんで来たが、こうして久方ぶりに面を会わせ、ことばに接すると、懐旧の情一入であるという心が籠められている。(廿九日)田野倉(現都留市)の梅丈の嫡子佐左衛門が訪問。「植てはすわる庵の茶筵 氷」(晦日)八代へ行く。

(五月五日)官友舎の諸子に誘はれて、岩泉山の大悲閣に詣でる。歌仙一折興行する。「軒に葺く草や折り交ぜさしも草 氷」五月五日は端午の節句の日である。菖蒲の咲く頃でそれで邪気を抜いたので菖蒲の節句とも言った。「日次

紀事」(貞享二刊)の一節に「市中の家々、菖蒲・艾葉よもぎを担間に挿し」などと見える。「さしも草」はよもぎの異名である。端午の節句に、邪気を除くという菖蒲や蓬を軒端に指す(葺く)習俗は敲氷の頃もまた近年までも続いていた。(八日)今夜草庵に螢を眺めて夜蘭よひななに及んだ。かの光りに各々一句ずつ吟じた。「水に遊び水にくだけて飛ぶ螢 柀里」「筵帆の入舟照すはたる哉 一元ざね」

(十二日)月次百韻興行。(廿日)求風亭に昼哺する。(廿三日)青羊来訪する。(廿五日)古尺本月十一日、抱山宇を出奔のよし老師より文通。下女あきかたよりも告来る。古尺野子へ贈る文通も届く。「散際もとがくしさや茨の花古尺」「故郷の空なつかしや時鳥 同」故郷へ赴き候哉と聞え候。(廿九日)守黒忌法筵。「時鳥を音楽になずらへ、茄子を百味とものし侍るも例のさびしみをもて祭る成べし。摘で来る夏花の籠に茄子哉 氷」「道一筋のふもと涼しき鬼孫」を発句・脇として五十韻を興行した。人々が待望して聞く時鳥の音を音楽として奉り、茄子を種々の珍味としてこの法筵に捧げるのは、芭蕉の説くさびの精神を以て祭るのであると前書きで述べ、「摘んで来る夏花の籠に茄子哉」と吟ずる。夏花なつばなは本来夏安居の間に仏に供える花の意であるが、ここでは守黒忌にお供えする夏の花の意をも兼ねている。夏花の籠に茄子も摘み入れられ、お供えされるところに、物質的なもの、外面的なさらびやかで豪華なものに眼を眩まされることなく、利害の打算を離れ是非の巷に低迷することのない、言わば「松の事は松に習い、竹の事は竹に習ふ」精神がある。これに応じて高弟として活動する鬼孫は「道一筋のふもと涼しき」と応じている。この一筋の道の中に守黒庵柳居も尊敬すべき先達として存在しているのである。早川石牙から文通「むら雨の柏ならして杜宇「石牙」「かんと鳥老し物かと思はるる 同」

(六月七日)白野天満宮奉納句、願主黒野田(現大月市)の白野連中の需めに応ずる。(十二日)定会百韻興行。「咲き乱す昼顔は日にもまれけり 氷」「鳥の巢や葺替近き軒の森 和好」(廿二日)八代へ行く。(廿四日)運水文通二

句。「短夜や堅き枕に気も付ず 運水」「橋守に聞けば更たり夏の月 同」(晦日)「露敬ぬしはさかしまなる喪に、寝
ていも忘るるばかり歎かるることほりいふべくもなし。もろこしの東門呉となんいふめる人は、子をうしなひしとき訪
ふ人に語りていへる、われもと子なき時うれへず、今子身まかりはべるも、もたらぬ折と同じさま也といへり。かゝる
ためしにもなずらへてなぐさみ玉へかしと申贈る。 無限樹の風にかはせ夏ころも 水」

東門呉は春秋時代の魏の人で、その子の死を悲しまなかつたことは、「列子」の力命編に見える。子を失って悲しむ門
弟露敬の歎息の痛切なのを東門呉の例を挙げて慰めようとしている。敲氷の漢学に通じていたことと共に「無限樹の風」
などという新語を創造している学識をも贅えたい。

(閏六月十一日) 信州諏訪の自徳から文通二句。「紙屑の中に見付けし螢かな 自徳」「青梅に立尽くしたる女哉 同」
(十二日) 月並百韻興行をする。(廿日) 霜後・乱竿から文通。「世は青き草木の中や紅の花 霜後」「蟬なくや赤き花
さく寺の内 同」「夕顔や昼は通らぬ穢多の門 同」「待って寝ず啼て寝させず時鳥 乱竿」(七月朔日) 引蝶入来。

(二日) 月次百韻興行する。連衆十五人。「接待や古びて読めぬ釜の銘 氷」敲氷次男長瓜この百韻興行で潮平と改号
する。(六日) 今夜小池氏の病氣訪に行く。(七日)「秋立や世に捨られし竹婦人 引蝶」(九日) 四日市場(現石和
町)の和咲勧進に応じ諏訪神社に奉納する。「野分にも動きはせじな御柱 氷」終里子の家とじが年比心結ばはれる病が
あり、この度信濃の国の伊那のいでゆに連れ立ち赴かれる。かしこはそのはら山もほどど近き由を聞いて旅立ちをことぶ
いての吟「長生きもとくさ刈る人にあやからん 氷」敲氷の句の前書にあるそのはらは長野県下伊那郡阿智村にあった
地名だといわれている。坂上是則の「園原や伏屋におふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな」(新古今集恋一・古今
六帖)を本歌として帚木を詠じた数多くの歌がある。歌枕となっている。「とくさ」は秋の季語で、その茎は多量の珪
酸を含み、粗で堅いため塩湯で煮て乾かし、柱・板・器物をみがくの用に用いた。敲氷はそのはらのとくさ刈る人を想像

し、終里の妻の入湯することによって健康を回復し長生することを祈っているのである。

(十一日) 夕暮吟朝入来。七日に東武から帰った由、かつしかの老師の事などもつと 物語るを聞いて安堵する。

夜初更迄物語る。(十二日) 巴人亭で歌仙一折興行し、夜三更に及んで帰庵する。(十五日) 盆会。蔵六善光寺詣して過訪。「今やひく駒の茄子に盆の月 氷」「代々の器磨くやたま祭」下平井(現、石和町)の喜庭(本名井上伴次郎) 山王社奉納句合の事によって来訪。(十六日) 元ざね消息して逢坂の清水といへる所での三句を告げる。

「星のあふ坂の清水を拝みけり 元ざね」

「雨降らばふれ宵過の銀河 同」

「玉まつり露の千種を立ながら 同」

谷路、筑路同伴で初めて来訪する。元ざねの息西松少年が大人の消息携へて訪れる。成川・亀六ふたりのぬしの武江に赴くを送る。「いざ月の形に縮ねん花すゝき 氷」(十八日) 県令黒川来訪。(十九日) 梅牛が久々にて来訪する。午時から元斎・茂林・如柳の三子が同伴にて来訪し、鬼孫が午時過ぎに西山より帰り、五吟で歌仙興行する。

幾年も同じ馳走やたままつり 如柳

さし入る月にくらき燈明 元斎

むささびの声ぞと聞けば淋しうて 敵水(下略)

今夜和戸(現甲府市) 百万遍念仏に参詣する。

(廿日) 養老園主人の一周忌法筵に招れ日暮れに帰る。(廿一日) 童歳来訪終日閑談する。(廿二日) 今井浄光寺の前の上人和鳴の隠察ができあがつて招かれる。「上人はひたぶるに妙法を観じ、折にふれて風月の口すさびもまめやかにていと尊し。」百采・童歳・元斎など連衆九人で世吉を興行する。

五七五の書写にはよけれ桐一葉 敲氷

浅き井筒にさし覗く月 和鳴(下略)

(廿三日) 童歳・元斎は今井(現、石和町)に投宿して帰さ來訪。(廿四日) 蛙橋・風條來訪。白桂長瓜同伴で入來、歌仙興行する。元斎・百朶・仙斧の三子も入來し、興行に参加する。

秋風や腸にしむ猿の声 白桂

岸漕く舟に半輪の月 敲氷(下略)

(廿五日) 春潮・源泉過訪。(廿六日) 茂林波連來訪する。(廿七日) 古岡東都へ贈るせうそこ携えて來訪する。(廿八日) 白龜來訪。花青より七名八鉢の濫觴を問われる。「七名八鉢」は支考の説いた俳諧付合論で、連句の付合の三方法として有心付・会釈・遁句をあげ、更に有心付を有心・向付むかひつけ・起情に分け、会釈を会釈・拍子・色立いろだてに分け、それらに遁句を加えて七つに分けたものを七名と称した。七名は前句に付句する趣向の立て方である。それに基づいて、付句を実際に句作りする付け方を、其人・其場・時節・時分・天相てんさう・時宜・觀相・面影の八つに分類し、これを八鉢と称した。支考は「俳諧古今抄」などで、付句の案じ方の「七名」と付句の付け方の「八鉢」を説いたが、敲氷もまたその影響を受け、門弟にも教授したものと推定される。(廿九日) 引蝶はうかひ山に泊り、今日過訪。谷水・和好は東屋參詣の序に過訪。白桂亭からうたひ本來る。平坡ぬしの椿堂の喪にこもり居るを訪う。「忘れじな枕あふぎし古扇 水」(八月朔日) 午時から石和へ往く。浦賀の鍊石から消息が来る。「初秋やこちらむきたる岸の船 鍊石」「薺や見に出る人も同じ顔 同」「今朝見れば振舞水に一葉哉 同」「縫上げを隠して下す躍哉 同」「物いまぬ嘉例有りけり魂祭 同」(二日) 來客、山泉・元斎・谷水・白桂・単柳。(三日) 岩泉山より善光寺に參詣する。留主中に、元ざね・細工人源國來訪する。申刻帰宅し來訪した天目山人と閑談する。(四日) 筑路・李言來訪する。夕陽三洞庵を訪い、夜谷水を訪

う。(七日)藤崎の僧過訪、「苗代や案山子の形のまだ寒き駿河風青」「荒島にたゞ青風の杉菜哉 同」(八日)春貝居士の大祥忌に招かれる。露敬過訪。今夜十節・巴人・魚道・仙鳥・元ざね・茂林・仙斧各同伴で来訪し、先夜三五亭で残った歌仙を満尾する。(九日)終里がしなの山の山家やまけの湯から帰ったのを元斎・仙斧・茂林が草庵で待ち受けた。今夜露敬が投宿し、潮平と共に三吟で歌仙一折興行する。座右稿に潮平の号が見えるのは最初である。

植込の奥も明るし月の庵 露敬

芋茹る間をしばしうたた寝 水

(十日)伴真章伊勢の両宮迂宮に詣でる由で過訪。即事送別「眺め倦かじ二見に二夜秋の月 水」「立帰り都のつとにかたりなむいく海山の秋の眺を 真章」かく詠んで短冊を残して置いた。知己の所へせうそくに添えてやる。元ざねが来訪。今夜終里亭を訪れた。

(十一日)伊賀国西明寺村布洲過訪。本名稲垣治右衛門。さかゝるや平七来訪。露敬小石和より帰り泊る。成川東都帰りを訪。竹翁隱士の病臥を訪ふ。(十二日)「蝶を見て都出でしか赤とんぼ 水」「関屋の軒にわたる秋風 潮平」を発句・脇として定会百韻興行。(十三日)「冷々と月さし入るや鳶の窓 百朶」「糸なき琴に通ふ鹿の音 水」白桂淹留。百朶・元斎来訪。四人にて歌仙興行。(十四日)巴人吉田・雀我過訪。宜交来訪、橋立明神奉納額渡す。「笹垣を借りても淋しからす瓜 よしだ 宣交」嵯峨重厚の東都からの消息に「白梅の月夜祈らん蟻通 重厚」蟻通あひどほしは大坂府泉南郡長滝村にある神社で、祭神は大名持命である。また「蟻通」は能楽の曲名で、紀貫之が歌を詠んで蟻通明神の怒りを鎮めたことが述べられている。その靈験あらたかな明神に、白梅の咲いている間月夜であることをお祈りしようというのである。「桜人世界は花と成にけり 重厚」「影うつす窓の若葉や角盪 同」「夏衣わたくし雨に濡てみん 同」「わたくし雨」は不意に降る村雨である。重厚の消息には次のような句集編集につき応募してほしいという二白(追申)が認められて

いた。「二白此度新類撰集仕候間其道の人々句々御集め可被下候。尤書林存者入料に及不申候。御老人をはじめ数多おのぼせ可被下撰者は今の落柿舎ト太溪俗名山本三河守と申候。京寺町押小路橋屋治兵衛方迄御越被下候へば届き申し候。」
(十五日)「名月や隈なきものは我白髪 氷」雨が降って本意なく口号「名月やふるものは雨か白玉か 氷」この白玉は真珠をさすであらう。(十六日)西山の秋水来訪。扇風来訪。夏音舎主人いへとじと共に、信濃国山家のいで湯に浴して、すくよかに帰らるゝを、こよひの月下にはぎ待る。「既望やいざよいも粥の喰競 氷」旅の咄の尽きぬ長き夜終里」今夜夏音舎に招かれて哥仙興行。ある人の角力の関に勝利を得侍りしを寿きて扇にかいやりける。「西東花野の中のをとこへし 氷」文通、「鞠垣へこぼれて来たり萩の花 米珠」「木樨や唐木造りの堂の裏 同」「川音も中に交りて遠砧 同」「雁啼や有用捨て戻り旅 同」

(十七日)五燕・白亀来訪。(十八日)表林忌独吟首尾十六句を手向けてぬかづき侍る。「写せく蒔絵の松に浦の月 氷」「夜寒の膝をよする香盆」「きりくす豊に近く声澄みて」「番がはりにはそはくとする。「ひらめきて風にもまるゝ継印」「よけ合広く懸し船橋」「初雪のとても降るなら積れかし」「すはや取まく湯豆腐麩の鍋」。「女房の留守へ付込むかるた好」「宵鳴するはつゝき鶏」「こそばゆく御油赤坂の馳走ぶり」「松葉の焚埃トふ濡物」「看病も目出度産の安々と」「探すとした今は汐時」「翌はとく作る荷筵花むしろ」「茶摘に通ふ麓たのしき」右首尾吟。

(十九日)百樹・竹曦・茂林来訪。竹曦表徳改めたきよし需に応じて五倉と称す。今夜素毛・終里・巴人・魚道・焚之・元ざね来訪。前三日終里亭興行の歌仙を継で満尾する。(廿日)終日曇、元齋湯島へ入浴の由過訪。尋古・念仏庵来訪する。百朶上人甘利へ出行につき、かつしかの用ども言伝を頼む。葛飾の師門瑟からの連絡を甘利の引蝶に伝えることを依頼したのであらう。斜めに百枝亭を訪ふ。

(廿二日)廬山来訪。(廿三日)白亀・一洞・可見・三枝・桂舟。「神垣の落葉の上に落葉哉 白亀」(廿五日)桂舟

田中より帰り過訪。山本助三郎過訪。本居氏の詠んだ歌について物語る。梅花齋主人の病氣見舞に訪れた留守に蕪人が来訪し「石森村孝女の伝」を置いて行く。

(廿六日) 酒折宮奉納句柳町連中の需めに応じた。「稲妻や火打袋は人しらず 水」(廿七日) 尺五郡内吟行の由で閑談に時を移す。「名月やよろづの影の正うつし 尺五」百朶上人中郡のかへき通訪。(廿八日) 八代へ行く。凌冬昨日下部へ湯治に発足の由。信州並木氏兩人逗留して閑談する。(廿九日) 洛からの消息に、聖護院の皇居近ければ「初鶏や内裏にならふ里の春 蝶夢」、春興として「あは雪やうづもるゝ葉に起きる草 同」、西行上人六百年忌双林寺にて「けふに逢ふも命也けり花のもと 同」右二月廿六日発しけるが近き頃到来。晦日谷水来訪。

(九月朔日) 一道法師来訪。白桂・括仙・かがみ三益来訪。(二日) 谷水来訪。二宮神官上野氏故北堂十三回忌に菊詠といふ題をもて勸進に「乳ぶさとも見るや荅の菊の露 水」(三日) 竹翁隠士は風雅の信に止まりて花月の席にかけ玉はざりしも、きのふのむかし語と成て、今は手向んことの葉も口ごもる心地ぞし侍る、「月を見し佛や残る 水」この隠士去月廿九日卒去。長秀ぬしの老父追善に「菊畠や人の主すむ譲り物 水」今日かもへ行った留守に終里来訪、午時過かもから帰って終里亭で歌仙一折興行して夜更けて帰る。(四日) 善光寺に参詣して府下まで行く。素毛・元ざね留守に来訪。(五日) 江戸平山勉齋号鳳習といふ人過訪。経学・書学を箕裘の業として往来し侍る由。平坡・大龍同伴にて過訪。蕪人来訪。永言今夕来訪。青柳への便舟待合わす。(六日) 永言逗留終日閑談。今夜永言と同じく求鳳亭で夜話する。(七日) 永言青柳へ赴く。素麟・風條・茂林三人再訪。(九日) 「作らねど貫ひ集めて菊の庵 水」「法師あり女も有て菊合せ 水」(十日) 茂林・福嶋来訪。「菊畠やつくぐと見て名を尋ね 春沢。」今夜長秀亭に招かる。各新蕎麦の吟有り。「新蕎麦や木曾の夢みる肘枕 水」「月漸寒く山近き宿 長秀」歌仙一折興行する。

(十一日) 今沢民五郎・広聡・蕪人来訪。玄曙・鬼孫両子終日閑談。(十二日) 定会百韻興行、連衆十六人。潮平夫婦

千助今夕迄逗留。(十三日)元ざね來訪、鬼孫もいて三吟で興行。「渺々と刈田の水や後の月 元ざね」「友呼ぶ鳩の漸寒き声 氷」(下略)「柿餅の馳走も出たり後の月 元齋」「程もなき霜置や後の月 鬼孫」「催馬楽を習ふ人あり後の月 氷」、秋江よりの消息に「稲むしろ敷ならべたり後の月 秋江」「なら里の宵寝起こすや鹿の声 同」(十四日)戸外・百樹・風條來訪。今夜求鳳亭へ招かる。「雨の夜や野を豎横に鹿の声 氷」「加茂の水湧出づる山の紅葉哉 氷」「水からのよき山里のもみぢかな 氷」(十五日)八代神事の競馬見に詣でて夜に入りて帰庵。(十七日)前の日秋江ぬしより茶の花を根こじて贈らるゝをむくひ侍る、「茶の霜行脚に破れし笠着せん 氷」筑路・魚麗來訪。(十八日)百紫・如柳來訪。(十九日)起干・永秋・雀我來訪。(廿日)元齋・可調來訪。(廿一日)五倉來訪。午時過美山亭に人々宴して、庭前のばせを葉の破れしをみて漫興「吹破れて詩人の好むばせを哉 氷」。黄昏より魚道亭に遊ぶ。「菊生けて置露待つや夕ま暮 魚道」「隈なく月を見する透垣 氷」歌仙一折興行する。(廿二日)湖東彦根の竹里松しま吟行のかへさのよしで過訪。閑能齋來る。爰の平橋庵尊師の御名をしたひてはじめて謁し侍りしに折々雨の降りければ予の名によせて「竹は猶淋しき音や秋しぐれ 湖東竹里」、湖東の竹里子に草の戸を叩かれて「しぐるれど染まるものなし庵の秋 氷」(廿三日)已より風起る。「わたくりの轆轤はづかししかの声 氷」。永言青柳より舟にて來訪し、風烈しく投宿する。(廿四日)百樹・谷水・永言の三客と朝のほど閑談する。今夜百樹亭に招かれて歌仙を興行する。百樹子のもとに遊んで人々秋の名残に沈吟しけるを、あるじは心さどく、茶の色折れていざ孤閨を破れ、枯腸を搜れなどほのめかさるるに興ずるのであった。「茶の花や茶杓に似たる枝も有り 氷」。あるじはかねて市を待つとて「茶の花や生けて客待つ水加減 百樹」「小春の鳥の賑しき宿 同」以下略。「誉の幕を打たる角力哉 百樹男 少年百雄」「梅もどき日當に來たる渡鳥 同」(廿六日)石原氏雀我來訪。(廿七日)舟雪來訪。春潮

(十月朔日)鳥下・鬼孫同伴にて來訪。勉齋過訪。写字三幅「みそさゝる垣穂に來なく小春哉」。(二日)如醉・柳霞

来訪、此ほど病気の体、夜に入って笹本氏岸誉上人過訪。(三日)うかひ山中嶺南窓で百韻興行、兼題小春。「日の永うならばと願ふ小春哉 氷」「朝なく雉子の声きく小春哉 氷」(四日)鳥下朔日より船待して逗留、今朝青柳へ出船する。(五日)指痛で午時迄臥した。秘鳥来訪。紅白園に招れて百韻興行。兼題は神留主。「かみさびて留主の日数をふるの宮 氷」(六日)昌房・李言来訪し歌の物語をする。谷水来訪夜話。(七日)仙斧・谷水来訪。芦沢氏白野よりの消息携え通訪。(九日)玄臨・五訪来訪。(十日)午時より鎮目へ行く。(十一日)源泉・三枝来訪。(十二日)芭蕉翁忌。俗談平話をたゞすといへるをしへの仰げばいよよ高きいよよかたし。「桶とちと句作りやせん帰花 氷」(十三日)行誉上人来訪。(十四日)小沢氏来訪。藤崎野遊身延詣かへさ過訪。野遊ぬし身延もうでのかへさ訪はるゝに謝して「帰り花鶯谷の物がたり 氷」今夜岩泉山の十夜に参詣する。(十五日)天目山人・亀石来訪。(十六日)石森迹代・富甲山和尚・亀六・一旧・上総國吐虹過訪。「雪の空山ふところや遅桜 吐虹(春の口号とて)。今宵為弓亭へ招かれて歌仙一折興行。(十九日)茂林・岩誉上人、信州上田塩尻眠戸といふ人過訪。発句所望される。善光寺近辺なるよし。春潮東都発足過訪。「巢作ろと啼鳥もあり小夜時雨 氷」(廿一日)落合・岩下に行き夕陽に帰庵。(廿二日)東原連代来訪。「夜遊ぶ鳥の殖けり後の月 乱竿」右九月十七日の消息去る廿日来る。「秋立やほどぼりさめる篝堂 氷」、浦賀吟行の折ふし口号とて聞ゆ。(廿三日)百朶上人来訪閑談。(廿四日)風條来訪。(廿五日)錦鳥ぬしは竹翁宮司追慕の俳筵にあるじもうけして、したしかりし人々を招かる。けふはかみな月末の五日なりけり。菊も紅葉もかはらねば、ゆくものはかくのごとしとにやいへる古ごともいよよおもひ出でらるぞかし。「なき人の座とりしてみるこたつ哉 氷」今日竹翁宮司辞世の句とて錦鳥脇を付け、五十韻興行。夜に入って帰庵。(廿六日)八代へ行き黄昏帰庵。留守へ吟朝来訪する。上総の国月鼠七十賀に友人吐虹より句勧進に「舞の腰かがまぬ老や里神楽 氷」十一月十五日賀筵もうけけるよし。(廿八日)百朶上人過訪、十節東武へ赴くよし告別に来訪。鳥下小沢氏青柳から来訪する。今夜巴人

亭にて十節祖座の宴。(廿九日) 国分(現、一宮町)の花桂来訪。

(十一月朔日)「鷹匠の肘はたゆまず霜の朝 氷」「置箱や那須野の石の毒も消せ 氷」那須野の石は、栃木県那須温泉付近にある溶岩である。鳥羽天皇の寵妃玉藻前(実は金毛九尾の老狐の化身)が安倍泰成に調伏されて正体を現わし、那須野の下って三浦の介義明と上総の介広常に射殺され、その執心が化して石となったもので、後深草天皇時代、玄翁和尚がここを通り、杖で一打すると二つに割れて中から石の霊が現れ成仏して消えたと伝えられる。実際は溶岩のあたりから吹き出す有毒ガスのため近づく小動物が死んだために殺生石と呼ばれた。謡曲「殺生石」があり、「奥の細道」にも「これより殺生石に行く」とある。(二日) 風條来訪。(四日) 素毛亭で今夜歌仙興行。各題くすり喰。「くすり喰密に人をすゝめけり 氷」くすり喰は新年の季語。(五日) 今日うかひ山靈石軒において、来庚戌歳旦春興の句を衆議する。今夜仙斧亭で宴あり。魚道ぬしの駿河の国に赴かるゝを送る折しも冬至の日也ければ「出る船に日の影測る綱手哉 氷」うかひ山にて各題雪、「雪の夜やよもよと思ふ客の声 氷」(六日) 宜文・茸柳・東武高野敬仲過訪。今夕上阿原へ行く。(七日) 枝雀・いせ横橋氏来訪。(八日) 信州塩尻の素水・眠戸、郡内よりかへさ過訪。亀六・敬仲来訪。今夜夏音舎で来成歳旦発句組題を定める。後座に歳暮題餅搗に蒸籠といえる題を得て「餅搗やせいろうに支干の合印 氷」(九日) 李言来訪、凌冬夜入来。

(十二日)「山里の雪見に行かん馬に鞍 氷」「硯の氷いとふふところ 花青」定会百韻興行。(十四日) 八代へ行、留主に百朶老衲・桑里来訪。(十五日) 兔徑^息・麻葛・可見・ふじ磯・青吟・野遊^弟来訪。今夜元ざね亭にて哥仙興行、四更過ぎて帰る。各題水鳥「水鳥の水を忘れて浮寝哉 氷」探題雪車「白砂に雪車の行衛や朝ぼらけ 水」(十六日) 谷水・^{成田}鳥水来訪。(十七日) 今日三社御幸。仙斧来訪閑談。(十八日) 元斎・敬仲・百朶・処言・筑路各同時に来訪、夜に入って行眷上人過訪。

(廿日) 白井小八郎・真田領石が甲府着過訪。芦葉来訪、十年余にて対面する。今夜求鳳亭で遊ぶ。(廿一日) 今夜終里亭にて夜話。(廿二日) 満雪来訪。童歳歳旦相談に来訪。歌仙一折興行。

(廿三日) 白亀来訪。(廿四日) 魚麗・谷水・波連来訪。今夜元ざね亭に麻葛投宿、訪ねて夜話。(廿五日) 麻葛過訪「埋もれて思ふまゝなり雪の庵 氷」(廿六日) 今夜元ざね亭に招かれて歌仙興行。各題ちどり、「千鳥みな吹払ひけり朝あらし 氷」探題追鳥狩(おいとがり)(冬の季語。山野で雉・鶉などを勢子に追い立てさせて、馬上から弓などで狩すること。)
「追鳥や雪吹に転ぶ処まで 氷」夜四更に及んで帰る。(廿七日) 兔徑(うさみち)・家風来訪。今夜求鳳亭にまねかる。(廿九日) 飛鳥過訪。元ざね夜話。

(十二月朔日) 近隣の人々来訪、平坡過訪。

「節季候の百囀や朝ぼらけ 氷」

里橋齋の収会に招かれて、あるじの篤実なるに徳潤身といふことを述べ侍る。

「隙あれば夜学する身の綿子哉 氷」歌仙興行。

(二日) 東都からの消息に四句

更る迄同じ拍子や里神楽 竹瓦

こがらしに吹かれて白し畑の土 同

河豚喰うた友に逢たるあした哉 同

知る人を嵯峨に尋ねて時雨かな 同

(三日) 彫工祇来訪。(六日) 鳥下・平坡代・阿丘・元齋・筑路来訪。(七日) 茄声過訪、行替上人来訪。(八日) 童

歳来訪し両吟興行する。信州より阿老僕来訪。永秋来訪。(九日) 仙白・正房・芦葉・雀我来訪。

老師ことし冬鱗老庵と軒をならべて卜居し玉ふはひなたほこりに隠者ふたり市をなさんと成べし。かゝれば深川のむかしがたりもまのあたり見る心地し侍る。

人に餅を搗せて庵の年用意 氷

(十日) 善光寺に詣で府下まで赴き、胡徳山の上人と閑談、夕陽帰庵。留主に長秀・夏明来訪。夕暮に笹川三甫・柳鶴坊同由春興句判断。

(十一日) 夏明過訪、垣師次兵衛訪来。(十二日)「節季候の百囀や朝ぼらけ 氷」「春を隣に賑はしき町 童歳」右脇起にて百韻興行。収会、愚評。連衆十五人出席。各歳暮といふ題にて「躍れくゝほどなき春に近江餅 氷」

(十三日) 平井喜庭来訪。(十四日) 光誉・三科順差来訪。(十五日) 芦葉・谷水・叔連・非一・光誉過訪。今夜夏音舎で夜話、歌仙一折興行。(十七日) 八代へ行く。今夜里橋齋にて夜話。留主に西山下為来訪。(十八日) 念仏庵で終日歌仙興行、各題年忘。「秋立つに茗荷も有かとし忘 氷」「二見形文台に題して、「年の内に立つや二見の波の花 氷」

(十九日) 良好法師来訪。(廿日) 鳥仙・可兄・谷水来訪。(廿一日) 節分。「枯尽きて門々青む柵かな 氷」(廿二日)「としの内に一節きゝぬ手鞠歌 氷」

(廿三日) 府下へ行黄昏に帰宅。(廿四日) 鳥仙ぬし掌中のたまと愛されし優児の早世を悼みて贈り侍る。「毬打売の

声聞くも嘸かしがまし 氷」可見ぬし令弟身まかりけるよし聞て贈る。「寒声の俤残る夜明哉 氷」(廿五日) 白亀・雅路代来訪。左二句岩淵より書音に聞ゆ。「流星の空に尖き霜夜かな 玉壺」「高らかに斧の刃音や初しぐれ 同」(廿

六日) 兎徑^息・三樹^息来訪。山名氏家中伊藤吉十郎過訪。「齒朶売の木の葉衣や雪の暮 氷」「齒朶売の扱ひもあへず雪の暮 同」(廿七日) 笛声・雨香

瓢に駒の画賛に冬籠とて

是見よや隙ゆく駒ぞ冬籠 水

(廿八日) 府下に行く。夕陽に帰庵。留主へ山風来訪。春潮東武かへさ過訪。今夜巴人亭にて夜話す。(廿九日) 高泉
政太郎過訪。平坡^代過訪。

二 俳諧指導の考察

(1) 平橋庵での月次会とその他の俳諧興行

宗匠である飯水にとって最も重大なのは月次会であろう。寛政元年(天明九年を含む)には、一月・二月・三月・四月・五月・六月・閏六月・七月・八月・九月・十一月・十二月の十二回の月次会が催された。定例日は十二日であるが七月だけが二日となっている。この月次会は例年のように百韻興行であった。一月初会は集まった連衆三十一人、二月・三月は十七人、七月は十五人、九月は十六人、十二月十五人で、四月・五月・六月・八月・十一月は連衆の数は記載されていない。一月の初会の連衆は天明七年が二十余人、同八年が三十人であるから、寛政元年の三十一人は安定した人数と考えてよい。その他の月の連衆は比較する記録もないが、十五人から十七人の間と考えて置く。これだけの連衆を指導するのは極めてのんびりした活動と思われそうだがそうではない。俳諧には式目があり、それを十分に心得ていなければならぬ。多くの場合は宗匠を補佐する執筆があり、付句する毎に式法上の違犯を指摘して訂正させるし、あるいは月・花の座を考えて然るべき人に出句を求めなどし、更に宗匠はその句の付句としての適否を吟味する。それによって、百句が変化と統一を兼ね備えた一作品として完成するのである。従って百韻興行の参加者は選ばれた俳人たちの集合であり、恐らく百韻興行に参加し得る能力と自信を充分に持っていたのは月次会に見える人数ぐらいであったと思われる。

月次会の百韻の草稿の現在残存しているものは三月・七月・八月・十二月に興行されたものである。三月十二日興行の百韻は連衆十六人で、「梅津にも梅より多し桃の花 平橋」を発句とし、童歳・米許・茂林・如翠・霜鏡・和鳴・風條・百朶・筑路・如柳・一古・魚藻・元斎・柳霞・池水で興行した。この百韻の草稿に松籟菴評とあり、平橋敲氷十八点・童歳全・米許十五点と記されている。敲氷は作品を評価するに当たり、常に客観的な不公平でない評価が望ましいと考えており、柳居系の松籟菴に評点を依頼したのであろう。寛政元年七月二日の百韻興行は、

接待や古びて読めぬ釜の銘 平橋

よせかけて置く杖に蜻蛉 長瓜

の発句と脇句に始まり、花青・如柳・筑路・和鳴・如翠・谷水・童歳・素麟・竹翁・元斎・引蝶・梅舎・百朶の十五吟百韻である。評点は柳居門系の尺五に請い、一童歳・二筑路・三長瓜（改め潮平）となっている。

同じく葉月十二日に催された百韻興行は、

蝶を見て都出でしか赤蜻蛉 平橋

関屋の軒に渡る秋風 潮平

という発句と脇で始まり、露敬・魚藻・秋紅・夏明・琴雪・元ざね・白桂・成川・谷水・花青・元斎・梅眠・可見・仙斧・霜鏡・梅牛・雅路・秘江・如柳・童歳・和唱・楚山・素麟・享泉・和鳴・華青の二十八吟であった。評点は雅路二十、成川二十、楚山二十となっている。評者の号は記されていない。

極月終会の百韻は

節季候の百囀りや朝ぼらけ 平橋庵

春を隣りに賑はしき町 亀六

鞭あてて追へども牛の静かにて 百夫

の発句・脇・第三に続いて、成川・白桂・谷水・如柳・鬼孫・童歳・元斎・仙斧・錦鳥・一楽・和鳴・霜鏡・キ六の十六吟であった。評点は付けず従って評者の記載もない。ともあれ敲水の月次会における姿勢は極めて指導的で、特に同門の優れた宗匠に評価を依頼し、門弟を鼓舞しつつづけている点は素晴らしいと言ふべきである。

月次会の百韻興行とは別に、来訪した門弟たちと随時に催される平橋庵での俳諧興行も、寛政元年には非常に数多く行われるようになった。まず座右稿から平橋庵で随時に催した俳諧興行を抜き出して見よう。二月十日童歳を迎えての両吟歌仙。二月十五日終里・元斎・素麟との歌仙。同夜素毛・敲水との歌仙一折。二月廿二日謂川との両吟歌仙一折。七月十五日元斎・茂林・如柳・鬼孫との五吟歌仙。七月廿四日、蛙橋・風條・白桂・長瓜・百桑との六吟歌仙。八月八日十節・巴人・魚道・仙鳥と歌仙興行。九月十三日元ざね・鬼孫と三吟歌仙。十一月廿二日童歳と歌仙一折興行。上記のような平橋庵での俳諧指導は多くは月次会での百韻興行と違って、訪問して来た門弟を対象として叮嚀な個別的な指導をしていると考えてよいであろう。

(2) 門弟主催の俳諧興行の流行

ここでは敲水が門弟や知友などに乞われてその門弟や知友の許で俳諧興行したものを取りあげた。その中には敲水が自ら望んで出向いて俳諧興行に参加したものもあると思われるが、平橋庵以外の場所で敲水の参加した俳諧興行を列挙することにする。

一月八日、加茂（現春日居町）の梅花齋初会。一月廿五日、三洞庵で聖廟法楽百韻。二月廿八日、終里亭で法筵歌仙。三月十六日、元ざね亭で歌仙興行。三月廿三日終里亭で敲水・求鳳と三吟歌仙。四月四日来雪亭で三吟歌仙。五月五日官友舎の諸子に誘われて、岩泉山大悲閣で歌仙一折。七月十二日巴人亭で歌仙一折興行。七月廿日養老園主

人一周忌法筵。七月廿三日今井（現石和町）浄光寺の前上人（加鳴）の隠寮落成につき九吟世吉興行。八月十六日夏音舎主人に招かれて歌仙興行。八月十九日夏音舎に招かれて過日の歌仙を継いで満尾する。九月三日柘里亭で歌仙一折興行。九月廿日魚道亭で歌仙一折。九月廿四日夜百樹亭に招かれて歌仙興行。九月廿一日魚道亭で歌仙一折興行。九月廿日百樹亭に招かれて歌仙興行。十月三日うかひ山中嶺南窓で百韻興行。十月五日紅白園にまねかれ百韻興行。十月十六日為弓亭に招かれ歌仙一折興行。十月廿五日竹翁宮司追慕の五十韻興行。十一月四日素毛亭で歌仙興行。十一月十四日元ざね亭で歌仙興行。十一月廿六日元ざね亭に招かれ歌仙興行。十二月朔日里橋齋の収会に歌仙興行。以上列挙しただけでも二十五回の俳諧興行に向いて指導をしている。なお「一月廿四日うかひ山初会」と日記に記されているのであるが、百朶上人によって催されたうかひ山の会には、初会だけでなくしばしば参加したと思われる。この外「八月朔日石和に行く。」「八月四日三洞庵を訪ふ。」などと簡単に記されている場合でも俳諧興行が行われた折もあったであろう。月次会の十二回と月次会以外に平橋庵で興行した俳諧数を合算すると、二十一回の俳諧興行を指導したことになり、更に門弟主催の俳諧興行の指導二十五回を加えると、少くとも四十六回の俳諧指導をしたことになる。これに五月二十九日朱黒忌追善興行と十月十二日の芭蕉忌法筵の俳諧興行を加えると総計四十八回の指導となり、月四回の割合で俳諧が行れたことになる。そしてその半数が、門弟の主催するところであった。またその形式も、歌仙十三、歌仙一折四、百韻三、五十韻一、世吉一、不明3である。多くは少人数で、しかも個人に即した指導を充分に受けることができたであろう。それ故に門弟主催の俳諧興行が流行するのであった。それはまた敲氷を核とする俳壇の発展と俳諧の向上とに連関している。

(3) 来訪者への指導

座右稿には平橋庵を訪れた門弟や知人の記録も明確であり、門弟・知人が持参した発句なども掲載されている。弟子

たちにとっては自作の発句に対して評価してもらい、個人的な指導を受けるために、師を訪門することは最良の手段であつた。そのように目的を持った人々の訪問を来訪と記し、他への用事のかたわら訪れた場合に過訪などと記して区別しているように受け取ることができる。今来訪者を列挙してみよう。

一月十七日蔵六来訪。(以下来訪の二字を省略して月日と併号を記す。)同廿日終里。同廿六日童歳。同廿九日桑里。二月十四日甫秋。同十六日柳美。同十七日池月堂。同廿日棲古・求古。同廿一日柳美。同廿二日市川謂川。同廿七日藤崎

中代表

同月晦日谷水。三月四日和狂。同十三日風條・元ざね。同十八日運水。同廿六日仲亮。四月廿七日引蝶。五月

八日終里・元ざね。同廿三日青羊。六月廿四日運水。七月朔日引蝶。同十一日吟朝。同十五日蔵六。同十九日梅牛・元齋・茂林・如柳。同廿七日古岡。同廿八日白亀・引蝶。八月朔日鬼孫令息。同二日元齋・谷水・白桂・胤柳。同四日筑

路・季言。同七日風国。同十日布川。同十四日谷水・省我。同十六日秋水・扇風。同十七日五燕・白亀。同廿日尋古・念仏庵。同廿二日廬山。同廿三日白亀・一洞・可見・三枝・桂舟。同廿七日尺五。同晦日谷水。九月朔日一道法師・白

桂・括仙かが多・三益。同二日谷水。同三日終里。同四日素毛・元ざね。同五日蕪人。同六日永言。同七日素麟・風條・

茂林。同十日茂林・福嶋。同十一日今沢民五郎・広聡・蕪人。同十三日元ざね・鬼孫。同十四日戸外・百樹・風條。同

十七日筑路・魚麗。同十八日百紫・如柳。同十九日起千・永秋・省我。同廿日元齋・可調。同廿一日五倉。同廿四日百橋・谷水・永言。同廿六日雀我。同廿七日舟雪。十月朔日鳥下・鬼孫。同二日如醉・柳霞。同五日秘鳥。同六日昌房・

李言・谷水。同七日仙斧・谷水。同九日玄臨・五芳。同十一日源泉・三枝。同十三日行營上人。同十四日小沢氏。同十

五日天目山人・龜石。同十六日上松園吐虹。同廿三日百朶上人。同廿四日風條。同廿六日吟朝。同廿九日花桂。十一月二

日風條。同七日枝雀・梗橋。同八日信州素水・眠戸。同九日李言・凌冬。同十四日百朶老衲・桑里。同十五日兔徑息・麻

葛・可見・ふじ磯・青吟。十六日谷水・鳥水。同十七日仙斧。同十八日元齋・敬沖・百朶・処言・筑路。同廿日苜蓿。

同廿二日満雪・童歳。同廿三日白亀。同廿四日魚麗・谷水・渡連。同廿七日兔徑^鼠・家風。十二月三日祗工。同六日鳥下・平坡代・阿丘・元斎・筑路。同七日行營上人。同八日永秋。同九日仙白・正房・芦葉・雀我、同十日長秀・夏明。同十三日平井喜庭。同十四日光譽・三科順差。同十七日為来。同十九日良好法師。廿日鳥仙・可兄・谷水。以上は平橋庵を来訪し、その発句を持参するなど敲水の指導を直接に受けようとして訪れた人々であった。寛政元年中のその延人数は二〇五名であり、その対応にも敲水は相当な努力をしているのであろう。来訪する側の問題意識が強ければ強い程、効果は多大であつたろう。例えば七月廿八日門弟の花青は七名八躰を敲水に質問しているが、敲水はその折教える喜びを感じたに相違ない。わざわざ質問内容を記している。なお訪れた人々の中に県令黒川がいて、一月七日と七月十八日に平橋庵を訪れている。これは敲水と県令とが親密な関係にあつたことと理解してよいであらう。七月廿九日白桂亭から「謡ひ本来る」というのも、敲水が謡ひや能楽に関心を寄せ、嗜みを持つていたことを推定させる。また、八月十日の「伴真章いせ両宮迂宮へもうで侍るよし過訪即事送別」「眺倦かじ二見に二夜秋の月 水」、留別の意を「立帰り都のつとにかたならなむ、いく海山の秋の眺を」真章かく詠じて短冊残し置ける、知己の所へせうそこに添侍る。」と記されている。ここにも神官真章と敲水の結びつきの強い深い心情の通じ合ひを感じる。更に八月廿五日、山本助三郎が来訪し、本居氏の詠んだ歌について物語つた。ここにも宣長に対する尊敬の心が通じ合っているようであるし、八月廿六日に蕪人が訪れ、留守に「石森村の孝女伝を置いて行つた。ここにも孝女に対する共通の意識を持っていたと思われる。「四月五日天目山人入来、十月十五日天目山人来訪」と記されている。天目山人は手島堵庵系の心学者で、末木（現一宮町）に忠款舎を設けていた。甲斐の代表的心学者との親交も敲水の心に響くものがあつたに違いない。

(4) 文通

文通は座右稿に記載されているものが二十三通ばかりある。門弟から敲水への質問は殆どない。最も多いのは葛飾か

らで、師門瑟をはじめとする柳居系の知友からであり、必ず発句が記されている。

(二月十三日の文通)「伸びくゝて結ぶ柳や丸木橋 再蝶」「白魚や今宵誓の初桜 同」「杖曳けば蛙の音や臘月 同」「梅が香や誰ぞと人問ふ垣隣 米珠」「世の中に構はぬ庵も初日哉 乱竿」「誰が子ぞ初商に齋売 抱山宇」(閏六月廿日の文通)「世は青き草木の中や紅の花 霜後」「蟬なくや赤き花さく寺の内 霜後」「待つて寝ず啼て寝させず時鳥 乱竿」(八月十六日)「鞠垣へこぼれて来たり秋の花 米珠」「木釋や唐木造りの堂の裏 同」「雁啼や有用捨てて戻り旅 同」「川音も中に交りて遠砧 同」(十月廿二日)「夜遊ぶ鳥の殖けり後の月 乱竿」「秋立やほどぼりさめる篝堂 米我」

江戸の門瑟関係の文通は合わせて六通であったが、上に掲げた発句は、敲水が俳諧修行時代の師門瑟をはじめ、知友の吟であって、時折文通をすることによって相互に作品を交換することは、年々に推移していく俳風を知り、また個性豊かな句風に接する、よい機会であった。

甲斐国外の俳人との文通も敲水の俳諧向上の支えとなっている。

(三月十日)「似た顔の一人も見えず涅槃像 尺五」「年々の東下りや雛の市 同」江戸からの文通と思われる。尺五は明和八年冬上府中の相川のほとりに草庵を結んで江戸にも往来しながら俳諧の宗匠として活動していた。(閏六月十一日)信州諏訪の自徳からの文通に「紙屑の中に見付けし螢かな」「青梅に立ち尽くしたる女哉」の二句。(四月十八日)信州伊奈の阿老よりの文通に「静かさや雪の音きく枯かしは 阿老」「桃咲いて酒売る家や藪の中 同」。(八月十四日)重厚よりの文通。重厚は蝶夢の弟子、京の僧で、去來の落柿舎を再興し明和八年「去來忌」を出し、「新類題撰集」を編纂して出版しようとしていた時である。東都から敲水への文通で「白梅の月夜祈らん蟻通 重厚」「桜人世界は花と成にけり 同」「影うつす窓の若葉や角盃 同」「夏衣わたくし雨に濡れてみん 同」を贈っている。蝶夢も亦八

月廿九日洛からの消息で「初鶏や内裏にならふ里の春 蝶夢」「あは雪やうづもるる葉に起きる草 同」。西行上人六百
年忌双林寺にて「げふに逢ふも命なりけり花のもと」(右二句二月廿六日発しけるが近き頃到着)。

(二月二日)「叱っては馬牽き向かず野分哉 青鳥」(三月十三日)「念仏のかねには散らぬ櫻哉 春沢」「永日や雨も
二三度降り休む 同」(九月十三日)「稲むし敷きならべたり後の月 秋江」(十二月二日) 東都より消息「更る迄同
じ拍子や里神楽 竹瓦」「こがらしに吹かれて白し畑の土 同」「知る人を嵯峨に尋ねて時雨哉 同」

上記の蝶夢の消息は八月廿九日到着したが、二月廿六日に発したものであるという敲水の注記があるように、文通は
相当に日時がかかったので、自由に利用することは困難であったが、蝶夢のような芭蕉を敬慕し芭蕉堂の修復をはじめ、
芭蕉の文集や俳諧集の刊行・研究を重ねたり、また重厚のような去来の落柿舎を再興し、義仲寺の住職となり、蝶夢の
援助で芭蕉百回忌を営んだ上方俳壇の中心的な俳人達と親しく交際を続けられたことは敲水にとっても引いては甲斐の
弟子達にとっても幸いなことと言えよう。それと共に江戸俳壇に活躍する、柳居の門弟である松籟庵太無・抱山宇門瑟
・浮亀庵卷阿を師とする俳人いわば同僚達と相提携することができたことは敲水の宗匠生活を支える重要な力となっ
ている。文通が具体的にそれを示していると思われる。

(5) 社寺奉納句

天明七年八年に続いて、敲水の社寺奉納句は多い。座右稿と運斤録を参考として要約すると次のようになる。

三月八日、川中島(現石和町) 閻魔堂奉納句跋 白亀勸進。「うそ鳥よ虚言囁らば舌ぬかむ 敲水」

三月十九日、亀石勸進、東屋社奉納額を携えて来訪。跋を奉納する。「行幸から道開けたり山桜 敲水」

三月廿四日、庄木社奉納和好勸進に応ずる。「桃の花折かけ筒のみきの口 敲水」

三月廿六日、御岳山(現金桜神社) 奉納筑路の願に応ずる。「神垣や盛り幾日の峰の花 敲水」(五月六月と奉納句合

を指導する。)

六月七日、白野天満宮奉納句勸進に応ずる。願主は黒野田(現大月市)の白野連中。五月に白野天神句合や四題句合が黒野田で行われた。

七月九日、四日市(現石和市)の和笑勸進で諏訪神社に奉納する。「野分にも動きはせじな御柱 敲氷」

七月十五日、下平井(現石和町)の喜庭勸進で山王神社奉納句合につき来訪する。十月に句合が下平井で行われ敲氷が指導している。

八月十四日、宣交に橋立明神奉納額を渡す。橋立宮奉納句合が東原連で催されている。

十月、奉納句合が柳町連で催される。敲氷指導。

十月、成田(現御坂町)の柳枝・烏水の勸進で敲氷の指導で奉納句合が催された。

記録不十分で奉納句合を指導をしている敲氷の句がまゝ脱落しているが、社寺奉納句合は依然として流行を極めている。

(6) 運斤録と敲氷の発句

運斤録には寛政元年五月から十月までの指導のメモが記録されている。五月の例を次に掲げよう。

(五月) 白野天神奉納句合黒野田催主三人。四題句合黒野田。橋立宮奉納句合、東原連。百韻多少庵。五月五題句合。

夏秋句合板垣連。五題句合和戸連。奉納句合筑路。歌仙岩下。歌仙二石和連。五十員石和連。歌仙三石和連。歌仙二荊沢。歌仙落合。句合同。句合石和。句合板垣。歌仙二荊沢。歌仙五民。百韻素麟。(計二十)上に俳諧の種類を示し、下に主催者名を示してある。それをどのように指導するかは、明確に区別するのは困難であるが、多くは一応出来上がった作品を加除添削して優れた作品とすることを目指したものであろう。中には奉納句合を作り挙げる過程で敲氷の指導を受けようとするものもあったと思われる。月別の小計を挙げると、六月に十六、閏六月に十六、七月に二十五、八

月に二十五、九月に二十二、十月に二十四、五月から十月までを総計すると一四八の指導すべき作品の種類とその催主とが記録されているのである。恐らくは催主である連衆や個人の希望を聞きながら調整し順次にメモにしたものと思われる。この一四八の事柄だけでも敲水の多忙を想定することができる。

ところで敲水の俳諧観はどうであつたらうか。五月廿九日守黒忌の五十韻興行の前書に「時鳥を音楽になずらへ茄子を百味とものし侍るも例のさびしみをも祭るなるべし。

摘で来る夏花の籠に茄子哉 敲水

道一筋のふもと涼しき 鬼孫(以下略)」

この前書の「例のさびしみ」「道一筋」の暗示するものは、柳居のさびしみであり、柳居の一筋の道であると共に芭蕉のさびであり、芭蕉の一筋の道であつた。十月十二日芭蕉翁忌には「俗談平話をたゞすといへるをしへの仰げばいよいよ高くいよいよかたし」。「桶とぢと句作りやせん帰り花 氷」と吟じている。「三冊子」に師の曰く俳諧の益は俗語を正すなり。つねに物をおろそかにすべからず。……と見える。芭蕉は俳諧の役立つ点は俗談平話を正して詩語にまで高めるところにあるとした。貞門や談林の俳諧は俳言(俗語)の卑俗珍奇なおかしみをねらいとしたのであり、これに對して芭蕉は「俗語を正すことを目指したのであつた。そしてその根底にはつねに物をおろそかにすべからず即ちに物の実を発見し表現することがあつたのである。やゝもすると俗談平話の放恣な拡大に陥ってしまうのを厳しくいましめたのである。敲水もまた芭蕉翁忌に当たつて芭蕉の俗談平話を正すことを目ざすが故に、今更のようにその教えの高遠で困難なことを慨歎しているのであつた。

もう一度寛政元年における敲水の発句を一瞥してみよう。

名月や隈なきものは我が白髪

作らねど貰い集めて菊の庵

新蕎麦や木曾の夢みる肘枕

雨の夜や野を豎横に鹿の声

吹破られて詩人の好むばせを哉

しぐるれど染まるものなし庵の秋

巢作ると啼鳥もあり小夜時雨

山里の雪見に行かん馬に鞍

水鳥の水を忘れて浮寝哉

埋もれて思ふままなり雪の庵

躍れ躍れほどなき音に近江餅

春ごとに聞けや齢も百千鳥

蛸の出て人怖しけり朧月

春雨や畑かけまはる爺が夢

苗代や苦はほどもなく菜の種

涅槃会や庫裏では猫の昼寝する

枯風の通うて鳴らせ雛の琴

蚕飼する宿は戸ざして春暮ぬ

摘むを見ても袖しばらるゝ桑の露

軒に葺く草や折り交ぜさしも草

右の句は寛政元年に敲氷の吟じた発句で俗談平話の色彩のある二十句を選んだものである。極めて淡々と俗談平話を用いて吟じているが、芭蕉が俗談平話と結びつけて説いている「常にものをおろそかにすべからず」ということ、即ち物の実を把握して表現することの重要さがなおざりにされていないであろうか。「雨の夜や野を豎横に鹿の声」の豎横などは、「奥の細道」の「路縦横に踏んで伊達の大木戸をこす。」の縦横の模倣であろうし、「山里の雪見に行かん馬に鞍」なども謡曲などの模倣に過ぎない。「苗代や苦はほどもなく楽の種」は「苦は楽の種」という諺を使ったのである。このような状態が発生したということは、敲氷の宗匠生活が余りにも門弟指導に忙殺されるに至ったからであろう。運斤録に見える多量な指導が、敲氷を蕉風俳諧から没落させる危機が到来したと言ってよい。